田嶋智太郎の FX レポート☆彡　　２０２４年０３月１４日更新分

■　市場はエヌビディアの値動きに敏感

この１週間、ドル／円の居場所は結構大きく変化した。前回更新分の本欄でも触れた６日のパウエル米連邦準備理事会（ＦＲＢ）議長による議会証言の内容が伝わるまでは、１４９円台後半の水準に居留まっていたドル／円が、週末８日にかけて一気に１４７円割れの水準まで下押すこととなったのであるから、これは少々驚きである。

一つには、ちょうど一週間前（７日）の東京市場で日経平均株価が寄り付き後に一時３８０円強の上昇（前日終値比）を見ていたところからほどなく急落に転じ、同日の終値が前日比で４９２円安となったことがある。これは、翌８日にメジャーＳＱ算出日を控えていたことで一部の投機筋が日本株を売り仕掛けたことによるところが大きかったわけであるが、理由はともかく動揺した市場は同時に円買いを加速させたものと考えられる。

そこに飛びこんできたのが、中川日銀審議委員による金融経済懇談会での発言。同氏が「賃金と物価の好循環が展望できる」などと述べたことが伝わると、途端にドル／円は１４８円割れの水準までスルスルと値を下げた。結局、８日には一時１４６．４８円まで下押す場面を垣間見たわけであるが、その要因は２月の米雇用統計の結果が弱めだったことに留まらず、日本時間の夕刻に一部通信社が「日銀はマイナス金利政策を３月に終了する方向に傾いている」などと報じたことが大きかった模様。以来、市場では「マイナス金利の解除は３月」との見方が俄かに大勢を占めるようになっていく。

さらに、８日のＮＹ時間には米半導体設計大手エヌビディアの株価が前日比で５．５５％もの大幅な下げを演じ、週明けの日経平均株価は取引時間中に一時１１００円超も値下がり（前週末比）する事態に。結果、当然のごとくドル／円の上値は押さえられたままとなる。

要するに、先週後半から週明けまでの市場では、まず日本のメジャーＳＱ算出に絡む混乱が生じていた。そこに、ＦＲＢ議長が市場の利下げ期待をけん制しなかったことや、７日の欧州中央銀行（ＥＣＢ）理事会で今年のインフレ率見通しが下方修正されたこと、日銀が３月にもマイナス金利の解除に動きとの見方が強まったこと、さらに２月の米失業率が想定以上に上昇したことなどなど、数々の材料が複雑に絡み合って市場を大いに混乱させたわけである。

そして、またここにきて市場はさらに迷い始めている。まず、１２日のＮＹ市場でエヌビディアの株価が大幅に値を戻し、ナスダック総合指数も大幅高となった。また、同日発表された２月の米消費者物価指数（ＣＰＩ）は予想を上回る内容となった。前回も述べたように、米インフレの粘着性にはなかなか強いものがあり、市場は６月利下げ開始の見方こそ変えていないものの、年内の利下げ回数を「３、４回」から「２、３回」に見直している模様である。

昨日（１３日）、２０２４年の春季労使交渉が大手企業の集中回答日を迎え、トヨタや日立など多くの製造業で満額回答が相次いでいると伝わった。しかし、今のところ日銀総裁から踏み込んだ発言は聞かれておらず、そのことが目先的に円の売り戻しを誘う格好となる場面も見られる。そして、いよいよ明日（１５日）には春季労使交渉の第１回「回答集計結果」が公表される。正味のところ、日銀のマイナス金利解除については３月、４月のどちらでも既に市場は「織り込み済み」のはずである。それでも、来週１９日に日銀会合の結果が明らかになったところで、あらためて仕掛け的な動きが見られる可能性は残る。

ひとまず、ドル／円については２００日移動平均線（現在は１４６．２８円処）のサポートが機能し続けるかどうかが当面の焦点。上値に関しては、１４８．１０－２０円処が一つの節目と見られる。一方のユーロ／ドルは、なおもリバウンド相場を継続中。１．１０ドル処から上に抜けられるかどうかが当面の焦点となる。　　（０３月０７日　０８：００）